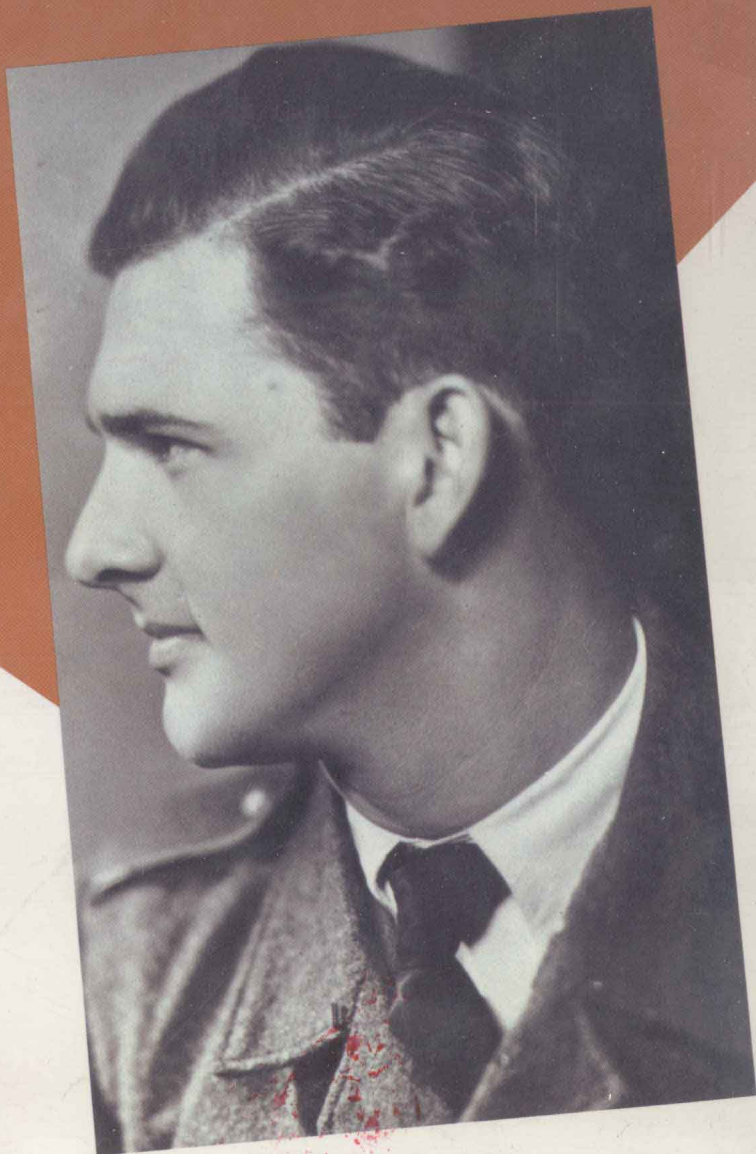


橋

ユダヤ混血少年の東部戦線

エルニ・カルツォヴィッチュ

増谷英樹・小沢弘明=訳



平凡社

はし
橋 ユダヤ混血少年の東部戦線

著者……エルニ・カルツォヴィツユ

訳者……増谷英樹・小沢弘明

発行者……下中 弘

発行所……株式会社平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5

電話 東京03(265)0471〔編集〕

03(265)0455〔営業〕

振替 東京8-29639

印刷……明和印刷株式会社

製本……株式会社石津製本所

発行日……1990年4月19日 初版第1刷発行

ISBN4-582-37305-4

乱丁・落丁本のお取替えは直接小社読者サービス係までお送り下さい
(送料は小社で負担します)。

橋——ユダヤ混血少年の東部戦線

エルニ・カルツォヴィッチュ

増谷英樹・小沢弘明 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

20世紀メモリアル

平凡社

Erni Karzowitsch

DIE BRÜCKE

Ein österreichisches Schicksal

© 1988 by Leykam Buchverlagsges. m. b. H., Graz

Translated by Hideki Masutani & Hiroaki Ozawa

Japanese edition © 1990

by Heibonsha Ltd., Publishers, Tokyo

Printed in Japan

目次

はじめに……………7

「一」ドイツ軍の進駐……………12

「二」「水晶の夜」……………18

「三」決断……………27

「四」前途……………31

「五」ロシアにて……………37

「六」退却……………42

〔七〕バルチザン……………	57
〔八〕凄惨な殺人事件……………	66
〔九〕背後の前線……………	70
〔十〕ポーランド娘イレネ……………	79
〔十一〕アウシュヴィッツ……………	84
〔十二〕脱出……………	100
〔十三〕近づく終焉……………	107
〔十四〕奇妙な現実……………	112
〔十五〕包囲されて……………	118
〔十六〕ヒトラー、子供たちを死においやる……………	123
〔十七〕幸運……………	135
〔十八〕故郷への道……………	142

「十九」親衛隊の手を逃れて……………149

「二十」家て……………153

「二十一」ムーア橋の救済……………156

「二十二」終戦……………159

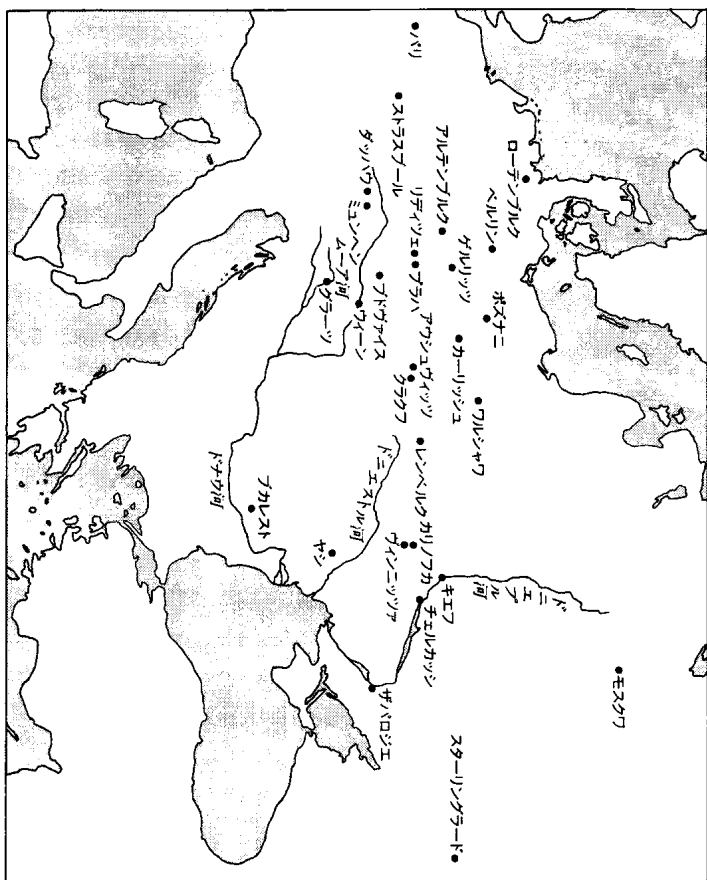
付録……………161

著者へのインタビュ……………166

解説……………184

訳者あとがき……………214

装丁——中島かほる



はじめに

ヒトラーはその著『我が闘争』において、「ユダヤ人」の絶滅をその目的として設定し、それをもう少しで成功させるところであった。その目的のために「ニュルンベルク法」^{*}が制定され、その法律によって私は「第一級の混血」という烙印をおされた。その結果、私は兵役不適格者とされ、学校から追い出され、シュタイアーマルク州から追放された。

私はそのことをむしろ良かったと思っている。というのは、私はドイツの軍隊に入らなくてすんだし、ドイツ帝国や歴史上最大の犯罪者であるヒトラーに宣誓せずにすんだのだから。私は非人間として蔑まれたが、つねに人間としての尊厳を守り、誇りを捨てることはなかった。また多くの辱めを受けたが、一度として父を恨んだことはない。だれも自分の親を選ぶことはで

*——ニュルンベルク法
一九三五年九月、ナチスのニュルンベルク大会において制定された「国家公民法」と「ドイツ民族の血と名譽を守る法律」の総称。これらにより、「ユダヤ人」の国民としての権利が制限され、「人種の混合」が禁止された。

きないのだから。この困難な時代のなかで、私はともかくも人間としての道は踏み外さなかったし、この時代を通じて、むしろ人間として成長した。戦争が終わった後、私はグラーツの「強制収容所連盟」で、人種上の理由による被害者部門の書記としての地位をえた。その職務を遂行するなかで、州裁判所で行われた、シュタイアーマルク州のブレイビルの虐殺に関する裁判の起訴状の朗読に立ち会った。議長は、イギリス占領軍の軍事裁判長が務めた。この犯罪行為に関しては、「付録」に述べておいた。

多くの僥倖と策略によって、私はゲシュタポの追跡を逃れることができた。ドイツの戦争用機器とともに、ロシアの地を黒海まで進み、その間にさまざまなことを経験した。私は、私がたどった道について語ろうと思う。私は、飢えた戦争捕虜たちを目のあたりにすると同時に、最初の死者たちを見た。その道は、「ドイツ軍には勝利しかない」というゲッベルスのスローガンに満ちていた。だが、そのスローガンがすべて正しいものではないことは、私にはわかっていった。なぜなら、私が見聞きしたことは、ゲッベルスの宣伝文句とは一致しなかったからである。ヒトラーはかつてある演説のなかで、「ドイツの兵士のあるところ、一歩たりとも退却などあり得ない」と述べた。

*2——ゲシュタポ

「秘密国家警察」の略称。「国家にとつて危険な動き」を監視・弾圧した。ゲスタポと発音するのが正確であるが、慣用にしがった。

*3——ゲッベルス

ドイツ第三帝国の宣伝相。一九四四年以降総力戦の責任者。

しかし、スターリンググラードの悲劇^{*4}とともに転換がやってきた。多くの将

校たちは、この戦争の愚かさを洞察していた。私が生命を永らえられたのも、おそらくは、あらゆる危険を顧みず人間であり続けた将校や、盲目の服従を肯^がんじなかつた人々すべてのおかげであろう。自分の兵士を仲間とみなしていた者は、あえてヒトラーに本当の状況を伝え、その不興をかつた。多くの者が階級を下げられたり、左遷されたりした。無責任な将校たちが、冬服を持たず夏の軍服のままの部隊を、ロシアの荒野深くに前進させてしまった。最高司令部や参謀本部には毛皮のマントがあつた。彼らは一九四二／四三年の冬があればほど寒かつたことをロシア人のせいにした。私は道すがら、ひどい凍傷を負つた兵士たちを見た。戦略家たちはどこにいたのか。彼らはそのことを予見できなかったのか。ただ、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅政策だけは厳格に遂行された。

ロシアの地において、私は多くの人々を助けた。年寄りや子供たちに、自分の糧秣からパンを与え、ロシア人の捕虜にタバコを差し出したりした。私はいつも、気の毒な人々に救いの手を差し伸べるようつとめたつもりである。野戦病院では、負傷者をたずね、怪我のため親族に手紙を書けない人々のために、代筆してあげた。助けはいつでも必要であつた。誰もがしゃべ

*4——スターリンググラードの悲劇

一九四二年十一月—四三年二月までのスターリンググラード（現ヴォルゴグラード）の激戦でドイツ軍が敗北し、少なくとも三十万人の損害を出したことを言っている。東部戦線の転換点となつた。



冬服を着て戦うソヴィエト兵
倒れているドイツ兵は夏服を着ている(1941/42年の冬)

うとしなかったこうした事実は、戦後にはすべて知られるようになった。

私は、強制収容所や、どこであれ殺人が行われたところでの、非道な虐殺者たちのことを思い出す。また、戦争の惨状をまえに逃走した親衛隊の兵士たちのことが、頭に浮かぶ。ナチスの幹部たちや親衛隊の将校たちは、戦利品を懐にして外国に高飛びしたり、^{*5} Uボートに乗って消え失せ、彼らが当然受くべき罰を逃れた。そう

した将校たちがこんにち、自分は自らの義務を果たしただけであると弁明するならば、私は、問うてみたい。「誰のために」と。ヒトラーは卑怯にもその責任を回避してしまった。^{*7} 第二次大戦で最も私腹を肥やしたゲーリング^{*6}や、ゲッベルス、ヒムラーなど、かつては肩で風を切って歩いていた者た

^{*5}——Uボート
Unterseeboot. ドイツの潜水艦。

^{*6}——ゲーリング
ナチス・ドイツの第二の実力者。
空軍司令官、国家元帥。

^{*7}——ヒムラー
第三帝国の警察長官、内相。

ちはみな、臆病にも「千年王国」*⁸を見捨てた。こんにちなお、あれは素晴らしい時代であつたなどと言うような度し難い者たちや、ヒトラーのような人物がもう一度必要だ、などと考える者たちは、そこから何の教訓も受けていないのだ。

ファシズムの犠牲者のための慰霊碑の多くには、「けつして忘れない」と書いてある。人間としての権利は、親衛隊の長靴に踏みにじられた。世界中のすべての人々が他の人々を尊ばねばならない。強制収容所や捕虜収容所などあつてはならない。都市に核爆弾が投じられるようなことがあつてはならない。そうした犯罪行為は、二度と繰り返されてはならない。

私の報告に何らかの特別なことがあるとすれば、それは「第一級の混血」という私の置かれた状態の特異性にあるだろう。いずれにせよ私は、私と同じような運命をたどった者を知らない。ドイツやオーストリアには多くの「混血」がいたが、彼らはいいていテレージエンシュタットの強制収容所に引つ張つていられるか、労働収容所に送り込まれた。亡命に成功した人は、ほんの一握りにすぎなかった。

この本が、世界中の人権・平和を護るための戦いに寄与できれば幸いである。

*8——「千年王国」
「永遠のナチス支配」を意味する言葉。一九三四年、バイエルンの大管区指導者アードルフ・ヴァーグナーが言った言葉から。

一 ドイツ軍の進駐

一九三八年三月十四日。それは奇妙に生温かい晩であつた。夜の帳が下りていた。私はシュトゥーピング・フリーザッハのムーア河に架かる橋の上に立っていた。グラーツ方面に向かう軍事車両のモーター音が聞こえた。ヘッドライトは消されていて、小さなライトだけが見えた。

「ドイツ軍だ！ ヒトラーの軍隊の進駐だ！」と誰かが言った。

橋守もそこに立っていた。彼は、年とつた男で、第一次大戦の生き残りであつた。その橋は、ロシア人の捕虜とイタリア人の抑留者たちによつて造られたもので、コンクリートで出来ていた。重い樹木や樹皮の運搬車がムーア河を越える必要があつた。皮革製造のために、樹皮圧搾工場が建てられたのである。——その時私は、かつてムーア河の河畔を歩いていて、軍隊用連発

ピストルを発見したことを、思い出した。当時は政治的にはきわめて緊張した時代であった。「そんなものを持っていたら処罰されるぞ」と言われ、私はそのピストルを学校に持って行って、先生に渡した。それきりその武器については、見たことも聞いたこともなかった。それは貴重な品であった。通りを軍隊がいくのを見て、私は戦争とイタリアの捕虜たちのことを思い出した。彼らは、私が見つけたようなピストルを下げた兵士に監視されながら、この橋を造ったのだ。

橋守が私を見て聞いた。

「ほかあいつたいどこを、行くつもりねえ。」

彼は一度も正しいドイツ語など習ったことがなかった。

「僕は、軍隊を見に行くんだけど。」

「おお、若えの。見に行かんでも、これから、いやっちゅうほど見られるけ。きつと、これから、よくねえこた、おこるばい」と彼は言った。

その間に、別の人々が橋を越えてやってきた。オーストリア・ナチスもその中におり、ドイツの兵士に嬉しそうに合図していた。私の父の知り合いであったその橋守は、私に言った。

「うちにお帰り。ここに居るとよくねえ。奴りや、おめえらのことを好い

ちやいねえから。」

十五歳だった私には、政治のことはわからなかったし、橋守の言ったことを理解できなかった。だが、橋守は何が起るかを予感していた。家に帰ると、私は母親に、たくさんの兵隊が橋を渡っていったと話した。母親は黙っていた。彼女にも悪い予感がしたのだろう。ヒトラーは「ユダヤ人」を迫害していたし、父はその一人であったから。

その夜、わが家は陰鬱な空気につつまれていた。父は、グラーツのある会社のために木材を買い入れに行っていて、留守であった。数カ月前から、父は実入りのいい仕事にありつけ、我々の生活も多少は良くなっていた。だが、すべてががらりと変わってしまうことになった。橋守の言ったことは正しかった。

同じ十四日に、村の宿屋ではヒトラーの肖像画とメタルのハーケンクロイツが売りにだされた。「非合法者」^{*1}たちはナチの歌を歌い、ビールを飲み、したたかに酔った。というのは、いわゆる「体制時代」^{*2}には、ビールを飲める者はほんの限られた人々だけであったから。だが今は、すべての者が仕事を手に入れ、失業は無くなるというのだ。それが、人々の口の端にのぼる話題であった。そして、「今日は」という挨拶は「ハイル・ヒトラー！」にと

*1——「非合法者」

一九三三年に禁止されたオーストリア・ナチスの党員をさす。

*2——「体制時代」

ヴェルサイユ、サンジェルマン条約による体制が支配していた時代。ナチスによる蔑称。

って代わられた。

三日後、妹のエーデイトが午前中に学校からもどってきた。妹の言うには、先生が、

「もう学校に來なくてよい。『混血』は学校から追放されるのだ」と言った
というのである。

だが、妹にとってそれはどうでもよいことであつた。いずれにせよ、彼女は学校が好きではなかつたのだから。なぜ学校を締め出されたか、妹には理解できなかった。

村の少年たちはみな、年長の青年に促されて宿屋の中庭に連れていかれ、行軍の訓練を受けた。ヒトラー・ユーゲント^{*3}の指導者がやってくるとのこと



少年時代の著者
自転車と(1940年頃?)
著者私蔵

*3——ヒトラー・ユーゲント
ナチス時代の青少年組織。一九二
六年に結成された。